城崎を憶ふ

泉鏡花

青空文庫

雨が、さつと降出した、停車場へ着いた時で——天象は卯の花くだしである。敢て字義に拘泥する次第ではないが、雨は其の花を亂したやうに、夕暮に白かつた。やゝ大粒に見えるのを、もし掌にうけたら、冷く、そして、ぼつと暖に消えたであらう。空は暗く、風も冷たかつたが、温泉の町の但馬の五月は、爽であつた。

俥は幌を深くしたが、雨を灌いで、鬱陶しくはない。兩側が高い屋並に成つたと思ふと、立迎ふる山の影が濃い緑を籠めて、輻とともに動いて行く。まだ暮果てず明いのに、濡れつゝ、ちらちらと灯れた電燈は、燕を魚のやうに流して、靜な谿川に添つた。流は細い。横に二つ三つ、續いて木造の橋が濡色に光つた、此が旅行案内で知つた圓山川に灌ぐのである。

此の景色の中を、しばらくして、門の柳を潜り、帳場の いらつしやい——を横に聞いて、深い中庭の青葉を潜つて、別にはなれに構へた奥玄關に俥が着いた。旅館の名の合羽屋もおもしろい。

へい、ようこそお越しで。挨拶とともに番頭がズイと掌で押出して、扨て默つて顔色を窺つた、盆の上には、湯札と、手拭が乘つて、上に請求書、むかし「かの」と云つたと聞くが如き形式のものが飜然とある。おや〳〵前勘か。否、然うでない。……特、一、二、三等の相場づけである。温泉の雨を掌に握つて、我がものにした豪儀な客も、ギヨツとして、此れは悄氣る……筈の處を……又然うでない。實は一昨年の出雲路の旅には、仔細あつて大阪朝日新聞學藝部の春山氏が大屋臺で後見について居た。此方も默つて、特等、とあるのをポンと指のさきで押すと、番頭が四五尺する〳〵と下つた。

（百 兩をほどけば人をしさらせる）古川柳に對して些と恥かしいが（特等といへば番頭座をしさり。）は如何？　串戯ぢやあない。が、事實である。

棟近き山の端かけて、一陣風が渡つて、まだ幽に影の殘つた裏檣子の竹がさら〳〵と立騷ぎ、前庭の大樹の楓の濃い緑を壓へて雲が黒い。「風が出ました、もう霽りませう。」「これはありがたい、お禮を言ふよ。」「ほほほ。」ふつくり色白で、帶をきちんとした島田髷の女中は、白地の浴衣の世話をしながら笑つたが、何を祕さう、唯今の雲行に、雷鳴をともなひはしなからうかと、氣遣つた處だから、土地ツ子の天氣豫報の、風、晴、に感謝の意を表したのであつた。

すぐ女中の案内で、大く宿の名を記した番傘を、前後に揃へて庭下駄で外湯に行く。此の景勝愉樂の郷にして、内湯のないのを遺憾とす、と云ふ、贅澤なのもあるけれども、何、青天井、いや、滴る青葉の雫の中なる廊下續きだと思へば、渡つて通る橋にも、川にも、細々とからくりがなく洒張りして一層好い。本雨だ。第一、馴れた家の中を行くやうな、傘さした女中の斜な袖も、振事のやうで姿がいゝ。

——湯はきび〳〵と熱かつた。立つと首ツたけある。誰の？……知れた事拙者のである。處で、此のくらゐ熱い奴を、と顔をざぶ〳〵と冷水で洗ひながら腹の中で加減して、やがて、湯を出る、ともう雨は霽つた。持おもりのする番傘に、片手腕まくりがしたいほど、身のほてりに夜風の冷い快さは、横町の錢湯から我家へ歸る趣がある。但往交ふ人々は、皆名所繪の風情があつて、中には塒に立迷ふ旅商人の狀も見えた。

並んだ膳は、土地の由緒と、奥行をもの語る。手を突張ると外れ

さうな棚から飛出した道具でない。藏から顯はれた器らしい。御馳走は——

鯛の味噌汁。人參、じやが、青豆、鳥の椀。鯛の差味。胡瓜と烏賊の酢のもの。鳥の蒸燒。松蕈と鯛の土瓶蒸。香のもの。青菜の鹽漬、菓子、苺。

所謂、貧僧のかさね齋で、ついでに翌朝の分を記して置く。

蜆、白味噌汁。大蛤、味醂蒸。並に茶碗蒸。蕗、椎茸つけあはせ、蒲鉾、鉢。淺草海苔。

大な蛤、十ウばかり。（註、ほんたうは三個）として、蜆も見事だ、碗も皿もうまい〳〵、と慌てて瀬戸ものを噛つたやうに、覺えがきに記してある。覺え方はいけ粗雜だが、料理はいづれも念入りで、分量も鷹揚で、聊もあたじけなくない處が嬉しい。

三味線太鼓は、よその二階三階の遠音に聞いて、私は、ひつそりと按摩と話した。此の按摩どのは、團栗の如く尖つた頭で、黒目金を掛けて、白の筒袖の上被で、革鞄を提げて、そくに立つて、「お療治。」と顯はれた。——勝手が違つて、私は一寸不平だつた。が、按摩は宜しう、と緣側を這つたのでない。此方から呼んだので、術者は來診の氣組だから苦情は言へぬが驚いた。忽ち、縣下豐岡川の治水工事、第一期六百萬圓也、と胸を反らしたから、一すくみに成つて、内々期待した狐狸どころの沙汰でない。あの、潟とも湖とも見えた……寧ろ寂然として沈んだ色は、大なる古沼か、千年百年ものいはぬ靜かな淵かと思はれた圓山川の川裾には——河童か、獺は？……などと聞かうものなら、はてね、然やうなものが鮫の餌にありますか、と遣りかねない勢で。一つ驚かされたのは、思ひのほか、魚が結構だ、と云つたのを嘲笑つて、つい津居山の漁場には、鯛も鱸もびち〳〵刎ねて居ると、掌を肩で刎ねた。よくせき土地が不漁と成れば、佐渡から新潟へ……と聞いた時は、枕返し、と云ふ妖怪に逢つたも同然、敷込んだ布團を取つて、北から南へ引くりかへされたやうに吃驚した。旅で劍術は出來なくても、學問があれば恁うは駭くまい。だから學校を怠けては不可い、從つて教はつた事を忘れては不可い、但馬の圓山川の灌ぐのも、越後の信濃川の灌ぐのも、船ではおなじ海である。

私は佐渡と云ふ所は、上野から碓氷を越えて、雪の柏原、關山、直江津まはりに新潟邊から、佐渡は四十五里波の上、と見るか、聞きかするものだ、と浮りして居た。七日前に東京驛から箱根越の東海道。——分つた〳〵——逗留した大阪を、今日午頃に立つて、あゝ、祖母さんの懷で昔話に聞いた、栗がもの言ふ、たんばの國。故と下りて見た篠山の驛のプラットホームを歩行くのさへ、重疊と連る山を見れば、熊の背に立つ思がした。酒顛童子の大江山。百人一首のお孃さんの、「いくのの道」もそれか、と辿つて、はる〳〵〳〵＼と來た城崎で、佐渡の沖へ船が飛んで、キラリと飛魚が刎出したから、きたなくも怯かされたのである。——晩もお總菜に鮭を退治た、北海道の産である。茶うけに岡山のきび團子を食べた處で、咽喉に詰らせる法はない。これしかしながら旅の心であらう。——

夜はやゝ更けた。はなれの十疊の奥座敷は、圓山川の洲の一處を借りたほど、森閑ともの寂しい。あの大川は、いく野の銀山を源に、八千八谷を練りに練つて流れるので、水は類なく柔かに滑だ、と又按摩どのが今度は聲を沈めて話した。豐岡から來る間、夕雲の低迷して小浪に浮織の紋を敷いた、漫々たる練絹に、汽車の窓から

手をのばせば、蘆の葉越に、觸ると揺れさうな思で通つた。旅は樂い、又寂しい、としをらしく成ると、何が、そんな事。……ぢきその飛石を渡つた小流から、お前さん、苫船、屋根船に炬燵を入れて、美しいのと差向ひで、湯豆府で飲みながら、唄で漕いで、あの川裾から、玄武洞、對居山まで、雪見と云ふ洒落さへあります、と言ふ。項を立てた苫も舷も白銀に、珊瑚の袖の揺るゝ時、船はたゞ雪を被いだ翡翠となつて、白い湖の上を飛ぶであらう。氷柱の蘆も水晶に——

金子の力は素晴らしい。

私は獺のやうに、ごろんと寢た。

而して夢に小式部を見た。

嘘を吐け！

ピイロロロピイ——これは夜が明けて、晴天に鳶の鳴いた聲ではない。翌朝、一風呂キヤ〳〵と浴び、手拭を絞つたまゝ、からりと晴れた天氣の好さに、川の岸を坦々とさかのぼつて、來日ケ峰の方に旭に向つて、晴〳〵しく漫歩き出した。九時頃だが、商店は町の左右に客を待つのに、人通りは見掛けない。靜な細い町を、四五間ほど前へ立つて、小兒かと思ふ小さな按摩どのが一人、笛を吹きながら後形で行くのである。ピイロロロピイーとしよんぼりと行く。トトトン、トトトン、と間を緩く、其處等の藝妓屋で、朝稽古の太鼓の音、ともに何となく翠の滴る山に響く。

まだ羽織も着ない。手織縞の茶つぽい袷の袖に、鍵裂が出來てぶら下つたのを、腕に捲くやうにして笛を握つて、片手向うづきに杖を突張つた、小倉の櫂の口が、ぐたりと下つて、裾のよぢれ上つた痩脚に、ぺたんことも曲んだとも、大きな下駄を引摺つて、前屈みに俯向いた、瓢箪を俯向に、突き出た出額の尻すぼけ、情を知らず故らに繪に描いたやうなのが、ピイロロロピイと仰向いて吹いて、すぐ、ぐつたりと又俯向く。鍵なりに町を曲つて、水の音のやゝ聞こえる、流の早い橋を越すと、又道が折れた。突當りがもうすぐ山懐に成る。其處の町屋を、馬の沓形に一廻りして、振返つた顔を見ると、額に隠れて目の窪んだ、頤のこけたのが、かれこれ四十ぐらゐな年であつた。

うか〳〵と、あとを歩行いた方は勝手だが、彼は勝手を超越した朝飯前であらうも知れない。笛の音が胸に響く。

私は欄干にそんで、返りを行違はせて見送つた。おなじやうに、或は傾き、また俯向き、さて笛を仰いで吹いた、が、やがて、來た道を半ば、あとへ引返した處で、更めて乘つかる如く下駄を留めると、一方、鎭守の社の前で、ついた杖を、丁と小脇に引そばめて上げつゝ、高々と仰向いた、さみしい大な頭ばかり、屋根を覗く來日ケ峰の一處を黒く抽いて、影法師を前に落して、高らかに笛を鳴らした。

——きよきよらツ、きよツ〳〵きよツ！

八千八谷を流るゝ、圓山川とともに、八千八聲と稱ふる杜鵑は、ともに此地の名物である。それも昨夜の按摩が話した。其時、口で眞似たのが此である。例の（ほぞんかけたか）を此の邊では、（きよきよらツ、きよツ〳〵）と聞くらしい。

ひと聲、血に泣く其の笛を吹き落すと、按摩は、とぼ〳〵と横路地へ入つて消えた。

續いて其處を通つたが、もう見えない。

私は何故か、ぞつとした。

太鼓の音の、のびやかなあたりを、早足に急いで歸るのに、途中で橋を渡つて岸が違つて、石垣つゞきの高塀について、打つかりさうに大な黒い門を見た。立派な門に不思議はないが、くゞり戸も煽つたまゝ、扉が夥多しく裂けて居る。覗くと、山の根を境にした廣々とした庭らしいのが、一面の雜草で、遠くに小さく、壞れた四阿らしいものの屋根が見える。日に水の影もさゝぬのに、其の四阿をさがりに、二三輪、眞紫の菖蒲が大くぱつと咲いて、縋つたやうに、倒れかゝつた竹の棹も、池に小船に棹したやうに面影に立つたのである。

此の時の旅に、色彩を刻んで忘れないのは、武庫川を過ぎた生瀬の停車場近く、向う上りの徑に、じり〳〵と蕊に香を立てて咲揃つた眞晝の芍藥と、横雲を眞黒に、嶺が颯と暗かつた、夜久野の山の薄墨の窓近く、草に咲いた姫薊の紅と、——此の菖蒲の紫であつた。

ながめて居る目が、やがて心まで、うつろに成つて、あツと思ふ、つい目さきに、又うつくしいものを見た。丁ど瞳を離して、あとへ一歩振向いた處が、川の瀬の曲角で、やゝ高い向岸の、崖の家の裏口から、巖を削れる狀の石段五六段を下りた汀に、洗濯ものをして居た娘が、恰もほつれ毛を掻くとて、すんなりと上げた眞白な腕の空ざまなのが睫毛を掠めたのである。

ぐらり、がたがたん。

「あぶない。」

「いや、これは。」

すんでの處。——落つこちるのでも、身投でも、はつと抱きとめる救手は、何でも不意に出る方が人氣が立つ。すなはち同行の雪岱さんを、今まで祕しておいた所以である。

私は踏んだ石の、崖を崩れかゝつたのを、且つ視て苦笑した。餘りの不狀に、娘の方が、優い顏をぽつと目瞼に色を染め、膝まで卷いて友禪に、ふくら脛の雪を合はせて、紅絹の影を流に散らして立つた。

さるにても、按摩の笛の杜鵑に、拔かしもすべき腰を、娘の色に落ちようとした。私は差ぢ且つ自ら憤つて洒を煽つた。——なほ志す出雲路を、其日は松江まで行くつもりの汽車には、まだ時間がある。私は、もう一度宿を出た。

すぐ前なる橋の上に、頬被した山家の年増が、苞を開いて、一人行く人のあとを通つた、私を呼んで、手を擧げて、「大な自然薯買うておくれなはらんかいなア。」……はおもしろい。朝まだきは、旅館の中庭の其處此處を、「大きな夏蜜柑買はんせい。」……親仁の呼聲を寢ながら聞いた。働く人の賣聲を、打興ずるは失禮だが、旅人の耳には唄である。

漲るばかり日の光を吸つて、然も輕い、川添の道を二町ばかりして、白い橋の見えたのが停車場から突通しの處であつた。橋の詰に、——丹後行、舞鶴行——住の江丸、濱鶴丸と大看板を上げたのは舟宿である。丹後行、舞鶴行——立つて見たばかりでも、退屈の餘りに新聞の裏を返して、バンクバー、シヤトル行を睨むが如き、情のない、他人らしいものではない。——蘆の上をちら〳〵と舞ふ陽炎に、袖が鴎になりさうで、遙に色の名所が偲ばれる。手輕に川蒸汽でも出さうである。早や、その蘆の中に並んで、十四五艘の網船、田船が浮いて居た。

どれかが、黄金の魔法によつて、雪の大川の翡翠に成るらしい。圓山川の面は今、こゝに、其の、のんどりと和み軟いだ唇を寄せて、蘆摺れに汀が低い。彳めば、暖く水に抱かれた心地がして、藻も、水草もとろ〳〵と夢が蕩けさうに裾に靡く。おゝ、澤山な金魚藻だ。同町内の瀧君に、ひと俵贈らうかな、……水上さんは大な目をして、二七の縁日に金魚藻を探して行く。……

私は海の空を見た。輝く如きは日本海の波であらう。鞍掛山、太白山は、黛を左右に描いて、來日ケ峰は翠なす額髪を近々と、面ほてりのするまで、じり〳〵と情熱の呼吸を通はす。緩い流は浮草の帶を解いた。私の手を觸れなかつたのは、濡れるのを厭つたのでない、波を恐れたのでない。圓山川の膚に觸れるのを憚つたのであつた。

城崎は——今も恁の如く目に泛ぶ。

こゝに希有な事があつた。宿にかへりがけに、客を乘せた俥を見ると、二臺三臺、俥夫が揃つて手に手に鐵棒を一條づゝ提げて、片手で楫を壓すのであつた。——煙草を買ひながら聞くと、土地に數の多い犬が、俥に吠附き戲れかゝるのを追拂ふためださうである。駄菓子屋の縁臺にも、船宿の軒下にも、蒲燒屋の土間にも成程居たが。——言ふうちに、飛かゝつて、三疋四疋、就中先頭に立つたのには、停車場近く成ると、五疋ばかり、前後から飛びかゝつた。

叱、叱、叱！　畜生、畜生、畜生。俥夫が鐵棒を振舞すのを、橋に立つて見たのである。

其の犬どもの、耳には火を立て、牙には火を齒み、焔を吹き、黒煙を尾に倦いて、車とも言はず、人とも言はず、炎に搦んで、躍上り、飛蒐り、狂立つて地獄の形相を顯したであらう、と思はず身の毛を慄立てたのは、昨、十四年五月二十三日十一時十分、城崎豐岡大地震大火の號外を見ると同時であつた。

地方は風物に變化が少い。わけて唯一年、もの凄いやうに思ふのは、月は同じ月、日はたゞ前後して、——谿川に倒れかゝつたのも殆ど同じ時刻である。娘も其處に按摩も彼處に——

其の大地震を、あの時既に、不氣味に按摩は豫覺したるにあらざるか。然らば八千八聲を泣きつゝも、生命だけは助かつたらう。衣を洗ひし娘も、水に肌は焦すまい。

當時寫眞を見た——湯の都は、たゞ泥と瓦の丘となつて、なきがらの如き山あるのみ。谿川の流は、大むかでの爛れたやうに……其の寫眞も赤く濁る……砂煙の曠野を這つて居た。

木も草も、あはれ、廢屋の跡の一輪の紫の菖蒲もあらば、それがどんなに、と思ふ。

——今は、柳も芽んだであらう——城崎よ。

大正十五年四月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集　巻二十七」岩波書店
　　1942（昭和17）年10月20日第1刷発行
　　1988（昭和63）年11月2日第3刷発行
※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。
※表題は底本では、「城崎《きのさき》を憶《おも》ふ」となっています。
※表題の下にあった年代の注を、最後に移しました。
入力：門田裕志
校正：米田進
2002年5月8日作成
2016年2月2日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

城崎を憶ふ

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/